

少年

第476号(1) 令和7年11月(霜月)発行



山 梨 県 警 察 本 部
生活安全部 人身安全・少年課
甲府市丸の内1-6-1
055-221-0110 内線 3082
少 年 対 策 官 島 口 浩 二

～育む～

『しづるれば 夕くれなぬの花ころも 誰がそめかけし 遠のたかねぞ』

(源俊頼)



近年、子どもの成長や発達をめぐる課題が多様化している。SNSトラブル、いじめ、不登校、孤立……。こうした問題の背景には、大人たちの「子どもとの向き合い方」が深くかかわっている。そのような今だからこそ、「どう育てるのか」ではなく、「どう育むのか」という視点で子どもとかがかわることが求められている。

「育てる」とは、教える、導くといった意味合いが強い言葉である。一方で「育む」とは、いつくしみ大切に、見守りながらその成長を支えることを意味する。子どもたちが自らの可能性を開花させるために必要なのは、大人による一方的な指導ではなく、温かく継続的なかわりである。寄り添いながら、時間をかけて子どもの持つ力を引き出し、支え続ける姿勢こそ、「育む」ことの本質といえるだろう。

子どもを育む営みは、家庭教育・学校教育・社会教育の三つの柱によって支えられている。家庭は子どもが最初に出会う社会であり、親は愛情と安心を与える最初の大人である。しかし、家庭環境の変化や地域とのつながりの希薄化が進む中、家庭だけですべての課題を抱え込むことは難しい。家庭に責任を押し付けて孤立させてしまえば、子どもをも孤立させ、親を追い詰めることになりかねないのである。

子どもが成長する場は、家庭だけではない。学校では学びや人とのかわりを通して社会性を身につけ、地域では異なる世代との交流を通じて多様な価値観を学ぶ。地域社会とのつながりは、子どもが「誰かに支えられて生きている」という実感を得る貴重な機会となる。また、自分が誰かの役に立つ経験を重ねることは、自己有用感の向上にもつながる。こうした多様な場での経験こそが、子どもの心の豊かさと生きる力を育むのである。だからこそ、家庭・学校・地域がそれぞれの役割を果たしながら連携し、補い合い、「社会全体で子どもを育む」という意識を共有することが大切なのである。

一方で、不登校などの問題が増加する中、支援を必要とする子どもに十分な手が届かない現実もある。もし学校や地域が「来ないのだから仕方ない」「できることはない」と手を放してしまえば、子どもは社会とのつながりを失ってしまう。子どもが学校に足を運べない背景には、不安や家庭環境など、複雑な要因や心の葛藤がある。そこに寄り添うことなく関係を断ってしまえば、子どもはさらに孤立してしまう。だからこそ、家庭訪問や地域の居場所づくり、立ち直り支援活動、専門機関との連携など、学校や地域が積極的に子どものもとへ出向き、つながりを保つ取り組みが重要となる。子どもを孤立させないこと、それこそが、「子どもを育む社会」への第一歩である。

子どもは一人ひとり異なる歩幅で成長していく。子どもたちが安心して夢を描ける社会をつくるために、大人たち一人ひとりが「育む」という姿勢をもって日々のかかわりを見つめ直すこと。それが、社会全体で子どもを育む意識を高めることにつながるのである。

ひこばえ

収穫期を終えたはずの田んぼが、再び一面の緑に覆われている光景に会った。刈り取られた株の間から稲が再び芽吹き、「ひこばえ」が風に揺れていた。ふつう収穫後の田はまもなく耕され、次の年に備えられる。しかし、天気の良い日が続くと数日で新しい穂が出ることもあり、これまでも見かけたことのある景色だった。

しばらくして再び訪れると、思いがけない光景が広がっていた。周囲の田がすっかり耕されているなかで、その一画だけが見事に穂を実らせていた。聞けば、近年の温暖化で春先から秋の終わりまで高温が続くため、試しに「二期作」に挑戦しているのだという。このような田を「稽田(ひつじだ)」と呼ぶのだそうだ。

はたして収穫できるかどうか、とのことだった。マイナスのイメージしか浮かばない地球温暖化。それでも、その変化を受け入れ、新たな道を切り拓こうとする姿に、想像力の豊かさとたくましさを感じ、胸が高鳴った。

第65回 山梨県中学生交通安全弁論大会

10月30日(木)、敷島総合文化会館において「第65回山梨県中学生交通安全弁論大会」が開催されました。県下警察署管内で行われた地区大会によって選ばれた代表者12名と、前回大会優勝校であり、開催協力校でもある甲斐市立敷島中学校の代表者の計13名が出場しました。自らの体験や身近に起こった出来事について、統計データなどをもとに、交通安全の大切さや交通事故のない社会になるために必要なことなどについて語りました。どの弁士もすばらしい内容と豊かな表現力で、聴衆の心に響く発表でした。

もしもの世界

甲斐市立敷島中学校 3年

丸山 美珠 さん

1日に1600件。あなたはこの数を、何の数だと思いますか？これは、1日に起きている交通事故の数です。県内約10件、全国約1600件。日常的にあるものではないので、多いと感じる人も、少ないと感じる人もいます。ただしひとつ、私は気づいてほしいことがあります。それは、私が今さっき「1日に」と言ったこと。この山梨県だけでも事故のない日は珍しい、という現状を捉えてほしいです。そして、私が今話しているのは、そんな身近な、交通事故の話です。

もし、あの車が猛スピードで私のもとに突っ込んできたら。通学中、信号待ちのときにふと思いました。そんなことはあり得ないと、十分にわかっています。でも、私の親友はそんな「あり得ない」はずのことに遭いました。

私には、同じクラスに親友がいます。優しくて不器用で真っ直ぐな、愛らしい親友です。その大好きな親友は今年の秋、接触事故に遭いました。彼女が自転車で交差点を直進しようと、ペダルを踏み込んだときでした。反対車線の車が右折して、彼女の方に曲がってきました。相手はどんどん近づいて来ます。車に気づき避けようとした彼女が、車の運転手の視界に入ったのは直前でした。彼女は車と衝突してしまいました。親友は、幸い大事には至らず、片足の負傷で済みました。暫くの間は運動ができなかったり行動が制限されたりとだいぶ不便な思いをしていましたが、私は正直、もっとひどい事態にならなくてよかったと安堵していました。

そんな、日常が戻りつつある時、冗談半分のような口調で何気なく、彼女は言いました。

「あの時私が避けてなかったら、死んでたかもね」

その瞬間、なんだかお腹の底が冷たくなるような、どうしようもない恐怖に駆られました。“もし彼女が車の音に気づかなかったら。もし、相手の車の速度がもっと出ていたら。もし、相手がブレーキを踏まなかったら。もし、最悪の条件が揃っていたら。今この子は、ここに居ない。”その事実は、存在し得る「もしもの世界」として、私の胸に深く突き刺さり、事故の恐ろしさを物語っていました。同時に、昨年、私はこの交通安全弁論大会の場に立たせていただくにあたって、交通事故を防止するためには何が必要か、たくさん考え、一生懸命に語りました。けれど、そんな私の身の回りでも事故は起こってしまうのだと、ひとりがたくさん考えたところで、その周りで事故が起こらないなんて保証はないのだと、痛感しました。

もしもの世界は、いつも私達の隣に潜んでいます。あなただって、もしこの会場に来るまでに事故に遭っていたら、今この場にはいないはずです。そんなもしものを減らすために、大切な家族や日常を守るために、最も効果的なのは、一人ひとりの意識を高めることです。そのためには、私が、あなたが、誰かが、繰り返し繰り返し語り続けなければならない。この話でひとつでも事故が減るなら、私は訴え続けなければいけない。どんな苦労も、人の命には代えられません。意識をずっと高く持つのがどんなに地道で大変だろうが、それは本当に本当に大切なことなのです。もしもの世界にしないために、まずは交通安全の意識を高めること、身近な人に声をかけることから、始めてみませんか。

《大会成績結果》発表者のみなさん、素晴らしい発表をありがとうございました。

賞	氏 名	中学校/学年	演題	警察署
優勝	丸山 美珠	敷島/3年	もしもの世界	甲斐
準優勝	上杉 紗永	竜王/2年	笑顔を守っていくために	甲斐
3位	柴田 気吹	松里/3年	通知より、命を見失うな	日下部
※記載順 は発表順	加藤 めい	秋山/2年	人がつくる「安全」	上野原
	渡邊 優月	三珠/2年	未来ある命を守るために	鯉沢
	前島 文香	一宮/2年	交通事故を起こさないために	笛吹
	大久保 乃瑛	甲陵/3年	その一歩を踏み出す前に	北杜
	佐野 さち	南部/1年	田舎と車と祖母と	南部
	渡邊 敬一郎	下吉田/3年	八十一億分の一の命だとしても	富士吉田
	飯野 心の	白根巨摩/3年	ながら運転とひきかえに	南アルプス
	忠本 美優	押原/3年	優しさが生む交通安全	南甲府
	上田 哲正	東桂/3年	命を守るヘルメット	大月
	白戸 健太郎	南西/3年	一秒で変わる未来	甲府

発行番号は昭和61年初号からの通算番号です。

http://www.pref.yamanashi.jp/police/p_syonen/shonenkoho.html